

# 「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受補助動詞の使用と習得

—JFL環境における中国人学習者を対象に

孫 成志

## ●要旨

**授** 受表現が既習の学習者でも、恩恵・利益の授受を表す場面に応じて授受表現を適切に使用するのは難しい。本稿では、恩恵・利益を表す授受補助動詞の使用場面を、話し手が直接聞き手に何かを依頼する「対話」の場面と、第三者から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述」の場面に分け、JFL環境における中国人上級学習者による「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受補助動詞の使用状況を調査し、日本語母語話者の使用状況と比較する。また、日本語の授受補助動詞の使用と習得に関わる要因を考察し、教育的示唆の提示を試みる。

## ●キーワード

「～テクレル」、「～テモラウ」、「対話」、「叙述」、中国人上級学習者

## ●ABSTRACT

The way of using Japanese Benefactive Auxilliary Verbs to express the benefit situation appropriately is difficult for all the Japanese learners. In this paper, the situations are divided into two categories, one is a dialogue in which the speaker asks a favor to the listener directly; the other is a description by the speaker to the listener about the benefit behavior of the third party. The author investigated the usages of Benefactive Auxilliary Verbs “-te kureru” and “-te morau” by the Chinese advanced learners of Japanese in a JFL environment, and made comparisons with the Japanese native speakers. Then, by analyzing the influential factors about learning and using them, the author made some suggestions to Japanese educators.

## ●KEY WORDS

“-te kureru”, “-te morau”, dialogue, description, Chinese Advanced Learners

## The Acquisition of Benefactive Auxilliary Verbs *-te kureru* and *-te morau*

For the Chinese learners of Japanese in a JFL environment

SUN CHENGZHI

## 1 はじめに

日本語母語話者との接触場面では、授受表現をすでに学んだ学習者の助詞の誤用や授受動詞間の混用など文法上の間違いのほか、(1)のように授受表現を使用すべきところで使用しなかったり、あるいは使用すべきでないところで使用してしまったりという語用論的な誤りが見受けられる(堀口1983, 田中1996)。日常生活におけるこのような誤りは、場合によっては相手に不快感を与え、思わぬ誤解や摩擦の原因になる可能性がある。

- (1) a. 私はそこへ行ったことがないので、友達が駅からトラックで連れて行きました。  
b. 日本では個性があんまり認められてくれないで、個人の意見よりも団体のほうが重要です。(堀口1983:99-100, 下線は筆者)

しかし、初級段階で授受補助動詞を学習済みの学習者が、どんな場面において上述した語用論的な誤りを犯すのか、またなぜこのような誤りを犯すのか、その状況については、まだ明らかにされていない。

そこで、本稿では、授受補助動詞の効果的な指導方法を探るため、JFL環境における中国語を母語とする日本語上級学習者(以下、中国人学習者)を対象に、質問紙調査を通して恩恵・利益の意味を表す「～テモラウ」と「～テクレル」系<sup>[註1]</sup>の授受補助動詞の使用実態と運用能力を調査したうえで、授受補助動詞習得上の問題点を解明することを目的とする。

## 2 先行研究と本研究の位置づけ

本節では、これまでの「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受補助動詞に関する研究を、両者の相違に関する検討や、その習得順序や使用実態に関する調査研究に焦点を当て検討していく。

### 2.1 「～テクレル」と「～テモラウ」の相違

両者は、話し手および話し手が視点を置く身近な人が、ある行為や事象によって利益を受けることを示す、受益表現である点で共通している。日本語教育の分野では、「話し手の視点の置き方による丁寧さの度合い」と「行為の与え手に対する働きかけ性の有無」の2点で使い分けられることが多い。

まず、話し手の視点の置き方による構文上の丁寧さの違いに関して、従来の解釈では、「～テモラウ」文の方が、恩恵の与え手、即ち行為者に対する表現が間接的になるため、「～テクレル」と比較して「やや丁寧」な印象を与えるとされている(井出ほか1986)。しかし、柏崎(1995)では、依頼の発話行為を例に談話の丁寧度を決めるのは、「教えてくれませんか」と「教えていただけませんか」という依頼文による違いよりも、理由を付け加えることや、「依頼要件」「陳謝」「状況説明」のどれを先に言うかなどの談話展開のパターンの違いであると主張している。つまり、文レベルではなく、談話レベルで依頼談話の丁寧度が決まるわけである。しかし、教育の現場では、授受補助動詞を用いた依頼発話の丁寧さが談話展開のパターンにより変わることと言及したものは少なく、「～テモラウ」文が「～テクレル」文より丁寧度が高く感じられる理由に関しては十分な説明がなされていない。

次に、授受行為の与え手に対する働きかけ性の有無に関して、益岡(2001)は「～テモラウ」受益文を「受動型」と「使役型」の2つに分け、働きかけ性の有無と恩恵性に強い関わりがあると述べている。さらに、山田(2004)は「～テモラウ」文を働きかけ性の程度によって、次の(2)に示すように「a. 依頼的テモラウ」「b. 許容的テモラウ」「c. 単純受影的テモラウ」に分けて考察している。また、「～テモラウ」と同じように受益文とされる「～テクレル」文であるが、「～テクレル」は話し手が受動的に恩恵を受けることを表すため、「～テクレル」と置き換え可能な「～テモラウ」は受動型のcの場合だけであると指摘している。

- (2) a. 私の気持ちが分かっているのであれば、私があの人にわざわざ辞めてもらったことをどう思っているか分かりますというものだけ。

- b. 彼の方から辞めたいと言ったのであって、わたしはそのまま何も言わず辞めてもらっただけなのよ。
- c. 辞めてほしいと思っていた人に、思いがけなく辞めてもらったことで、直子は少しは気も晴れた。(山田2004:121-122)

## 2.2 授受補助動詞の習得順序と使用実態に関する調査研究

大塚(1995)、坂本・岡田(1996)、田中(1996)は、様々な母語話者による発話や作文のデータを用い、授受表現の習得順序について検討を行った。その結果、調査協力者の学習環境や母語の相違にかかわらず、「～(て)あげる」がより早く習得される、という点で一致した。しかし、「～てくれる」と「～てもらう」の習得順序については、同じデータ収集方法を採用しても、結果は一致していない。この要因については、データ収集方法以外に、学習環境(JFLかJSL)、日本語の習熟度、話し手の授受行為の関与の有無(視点の置き方)および学習者の母語による影響などがあると指摘されている(尹2004)。

そして、使用実態に関しては、田中(1997)では、「～てくれる」が「～てもらう」より早い時期から数量的に多く生成され、さらにレベルの上昇、日本滞在の長期化に伴い日本語母語話者の使用文法状況に近づくと、学習者の授受表現に関する文法知識が中級中期ごろにかなりできあがると指摘している。一方、荒巻(2003)では学習者の授受表現を使って文法的に正しい文を構成する能力と、場面に応じて使用すべきかどうか適切に判断する能力との関係を検証した結果、2つの能力は一致していないことが報告されている。

しかし、先行研究では、JFL環境における学習者を対象とする、授受行為者の上下・親疎関係も含めた実際の言語運用場面における授受補助動詞の使用状況に関する調査研究は殆どなされていない。そして、行為の授受に「話題の人物」<sup>[註2]</sup>である第三者が関与することが、授受補助動詞の選択と使用にどのような影響を与えるかについても、まだ検証されていない。

## 2.3 本研究の位置づけ

本稿では、行為の授受を表す会話の場面を、行為の授受に「話題の人物」が

関与するかどうかによって、(3a)のような「話し手が直接聞き手(行為の与え手)に依頼や感謝などの発話行為を行う対話の場面」(以下、「対話の場面」と)、(3b)のような「話し手が「話題の人物(行為の与え手)」から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える叙述の場面」(以下、「叙述の場面」)に分け、JFL環境における中国人学習者による「～テクレル」と「～テモラウ」系の使用実態を明らかにし、教育的示唆を得ることを目指す。

### (3) a. 「対話の場面」

留学生：先生、すみませんが、履修届にサインしてもらえますか。  
／履修届にサインしてくださいませんか。

先生：いいですよ。どこに？

### b. 「叙述の場面」

友達：昨日大雨だったけど、どうやって帰ったの？

留学生：帰りに偶然田中さんに会ってき。彼に駅まで送ってもらったんだ。／彼が駅まで送ってくれたんだ。

なお、本調査では、(3a)のような話し手が直接聞き手に働きかける「対話(依頼)」の場面と区別し、(3b)のような「叙述の場面」では、話し手が直接働きかけをしていないにもかかわらず行為の与え手である第三者が恩恵的な行為をしてくれたことを想定し、場面設定には「あなたが頼んでいないにもかかわらず」といった説明文を入れた(付録資料を参照)。

## 3 調査概要

### 3.1 調査協力者

JFL環境における日本語能力試験N1に合格した上級日本語学習者の授受補助動詞の使用実態を、日本語母語話者(以下、JN)と比較し調査するため、本調査では、中国の東北地方にあるA・B大学と、日本の関西地域にあるC・D大学に在籍している大学生・大学院生(以下、CJ)から調査の協力を得た(表1)。

表1 調査協力者の概要

	中国人学習者 (CJ)	日本語母語話者 (JN)
人数 (男/女)	80名 (30/50)	50名 (21/29)
専攻 (人数)	材料科学 (20) 機械貿易 (20) 日本語 (32) 応用言語学 (8)	ベトナム語 (16) 工学 (10) 経営情報 (15) 情報ビジネス (9)
日本語能力	日本語能力試験1級/N1	
日本語学習歴	2.8 ~ 4.5年	

表3 調査紙の場面設定 (問II「叙述の場面」)

NO	行為の与え手 (話題の人物)	行為の与え手と受け手の関係	聞き手	叙述の内容
1	会社の上司	上位・親	友人	上司が車で家まで送ってくれた
2	高校の同級生	同等・親		同級生が京都を案内してくれた
3	大学の後輩	下位・親		後輩が代わりに本を返してくれた
4	父	ウチ		父が自転車を修理してくれた

### 3.2 調査方法

調査は談話完成テスト (Discourse Completion Test: DCT) を用いて行った。今回の調査では授受補助動詞が用いられると考えられる場面の中から、①話し手が直接聞き手に何かを依頼する「対話の場面」(表2) と、②第三者から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述の場面」(表3) を選び、授受行為の与え手と受け手の力関係 (上位・同等・下位)、親疎関係 (親のみ) と依頼行為の負担度 (高・低) の3つの指標を組み合わせて10個の状況を設定した。

なお、授受補助動詞を使用するかどうかの選択理由などについては、質問紙調査後、CJの8人にフォローアップインタビュー (以下、FUI) を行い、補足的にその考察を試みた。調査期間は2011年4月～7月の間である。

表2 調査紙の場面設定 (問I「対話の場面」)

NO	行為の与え手 (聞き手)	行為の与え手と受け手の関係	負担度	依頼の内容 (被依頼者が行う行為)
1	大学の先生	上位・親	低	履修届にサインをする
2	ゼミの同級生	同等・親		消しゴムを貸す
3	大学の後輩	下位・親		シフト表を2階に持って行く
4	大学の先生	上位・親	高	手書きの推薦書を書く
5	ゼミの同級生	同等・親		授業のノートを2週間貸す
6	大学の後輩	下位・親		文献をドイツ語に翻訳する

## 4 調査結果と考察

### 4.1 「対話」「叙述」場面別の授受補助動詞の使用率

表4 「対話」「叙述」場面別の授受補助動詞の使用状況

	「対話」			「叙述」		
	使用 (率)	無使用 (率)	計	使用 (率)	無使用 (率)	計
JN	186 (62%)	114 (38%)	300 (100%)	185 (94%)	15 (6%)	200 (100%)
CJ	309 (64.4%)	171 (35.6%)	480 (100%)	258 (80.6%)	62 (19.4%)	320 (100%)

表4に示すように、「対話」の場面では、CJとJNによる授受補助動詞の使用率はよく似ているが、「叙述」の場面では、授受補助動詞の無使用率<sup>[注3]</sup>がCJは19.4%で、JNの6%と比べ、はるかに高かった。そして、CJとJNの授受補助動詞の使用例数についてカイ2乗検定を行った結果、「叙述」場面では有意差があった ( $\chi^2(1) = 13.758, p = .0002 < .001$ )。「対話」場面では有意差は認められなかった ( $\chi^2(1) = 0.548, p = .46 < .05, n.s.$ )。そこから、授受補助動詞を使用すべきところで使用しない「不適切な無使用」の現象が、第三者から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述」の場面においては、CJにおいて、より目立つことが分かる。

- (4) a. (上司が車で家まで送ってくれたことを聞き手に伝える場面)  
 会社の上司に車で送られてきました。大丈夫でした。(問II 1, CJ34)<sup>[註4]</sup>  
 b. (後輩が代わりに本を返してくれたことを聞き手に伝える場面)  
 ええ、後輩の岡田さんが代わりに返したんだ。(問II 3, CJ35)

CJの発話では、話し手が行為の与え手である第三者から恩恵を受けているのに、(4)のように客観的に物事を述べているような発話例が多く見られた。日本語では、第三者の情報に関しても、話の中に登場する人物に感情移入し、その立場に立って「立場志向文」<sup>[註5]</sup>を用いて話し手の立場が示されるが、中国語では、事実をそのまま客観的に記述する「事実志向」の傾向が強い(水谷1985)。上述した「不適切な無使用」現象は、中国語の「事実志向」の現れであり、両言語話者の物事に対する概念の相違に起因するものではないだろうか。

## 4.2 各授受補助動詞の使用状況

各場面における「～てくれる」「～てもらう」「～てくださる」「～ていただく」の4つの授受補助動詞の使用状況を図1にまとめた。

まず、CJによる「～てくれる」と「～てもらう」の使用状況に関しては、「対

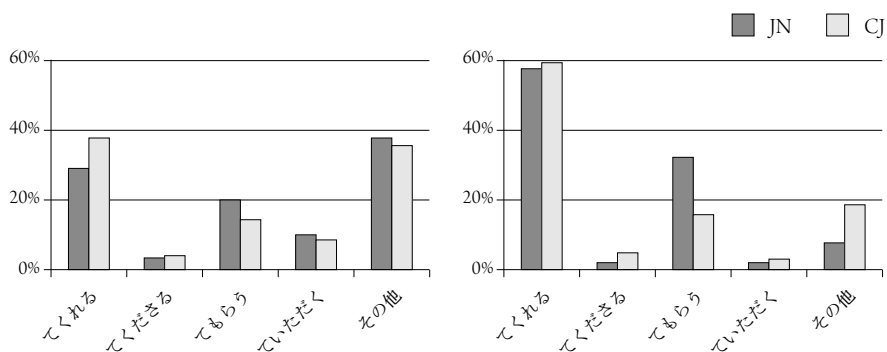


図1 授受補助動詞の使用状況 (左図は「対話」、右図は「叙述」の場面)

話」と「叙述」のどちらの場面においても、「～てくれる」の使用率が「～てもらう」より高く、「～てくれる」が比較的多用され習得が進んでいることが分かる。その理由として、次の2点を指摘したい。

1つ目は、日本語教科書における各授受補助動詞の出現頻度との関係である。中国国内でよく使用されている3種類(12冊)の初・中級教科書<sup>[註6]</sup>を調べた結果、どの教科書においても「～テクレル」と「～テモラウ」系の授受補助動詞は、依頼の発話行為と関連づけて取り上げられることが多いことと、全巻にわたり3系列7形式の授受補助動詞のうち「～てくれる」の出現頻度が最も高いことが分かった。

2つ目は、母語である中国語の影響である。中国語には日本語の授受補助動詞「～てあげる」と「～てくれる」に対応する授与を表す前置詞句「给…」「为…」(～のために)、「替…」(～にかわって)などの句型が存在するが、「～てもらう」においては、「使役型テモラウ」構文の場合、中国語では依頼使役文「Xが请/让YV」に近い意味で用いられることができる(奥津・徐1982)が、依頼の意味のない受益文を中国語に訳す場合は、能動文、あるいは「受ける+動作を表す名詞」の形の迂動的受動表現を用いる(井上2011:40)。そして、「～てもらう」か「～てくれる」のどちらを選択した理由については、「本を返したのは後輩のため、その動作主を主語にした」(FUI07)<sup>[註7]</sup>というような回答が複数あり、特に「叙述」の場面では行為者(行為の与え手)を主語にすることを好む傾向が強く見られた。そのため、話し手の「視点」が行為の受け手にあり、その受け手を主語とする「～てもらう」構文の習得は比較的困難であることが考えられる。

次に、待遇表現「～てくださる」と「～ていただく」の使用状況に関しては、使用率から言えば、「対話」と「叙述」のどちらの場面においても、全体的にCJはJNとそれほど差はない結果であった。しかし、場面ごとに考察すれば、CJは、特に待遇性の高い場面において上位者である行為者に敬意を過剰に表し、行為者との上下関係を言語化する傾向が強いという特徴が見られた。例えば、(5a)のような「対話」の場面のみならず、(5b)のような待遇性の高い「叙述」の場面においても、行為の与え手がその場にはいないにもかかわらず、上司の行為に対し「～てくださる」(12例)、「～ていただく」(8例)の待遇表現を

用いており、JNの3例のみのデータと比べると、上位の行為者に敬意を過剰に表していることが特徴である。

- (5) a. (「対話」履修届けにサインをすることを先生にお願いする場面)  
すみませんが、履修届けにサインをしていただけませんか。

(問 I 1,CJ02)

- b. (「叙述」上司が車で家まで送ってくれたことを聞き手に伝える場面)  
ええ、上司の松島係長が送ってくださって、助かりました。

(問 II 1,CJ11)

さらに、2例のみだが、「叙述」の場面において、「父がこの前、修理してくださったんだ。」(問 II 4,CJ55)のように、身内の行為に対して敬語表現を使用した例もあった。

上述の考察から、中国人学習者は、行為の与え手との上下関係を言語化するために、「～てくれる」「～てもらう」「～てくださる」「～ていただく」授受補助動詞の各言語形式を使い分ける傾向がうかがえる。これは、親・疎という意識より、相手との上下関係をより重視する中国母国の文化や習慣からの影響が強いと推測できる。例えば、「～てくださる」や「～ていただく」を用いた理由については、「その場になくても、上司や先輩が地位の高い人または年上の人のため、「～ていただく」などを使って敬意を表すべきだ」(FUI08)といった回答があった。また、後述のように、「親かつ下位」の後輩に対して、命令や指示の機能も果たす「～てください」や「～てくれ」を用いて依頼を行う用例も見られた。つまり、CJは、授受補助動詞を選択して使用する時、行為の与え手との上下関係をより重視することが特徴である。

### 4.3 依頼行為の負担度による使用上の相違

今回の調査では、「対話(依頼)」の場面において、相手にかかる依頼行為の負担度がCJによる授受補助動詞の使用と選択にはほとんど影響を与えないという結果が得られた。

表5に示すように、JNは負担度が高い場合、恩恵・利益を表す授受補助動詞

表5 「対話」場面における「負担度」による授受補助動詞の使用状況

	負担度	授受補助動詞	その他の表現	計
JN	低	66 (44%)	84 (56%)	150 (100%)
	高	120 (80%)	30 (20%)	150 (100%)
CJ	低	147 (61.2%)	93 (38.8%)	240 (100%)
	高	162 (67.5%)	78 (32.5%)	240 (100%)

の使用率が、44%から80%へ大幅に増加したが、CJの場合は、JNと違い、負担度の高・低による授受補助動詞の使用率に関する相違はほとんど見られなかった。そして、負担度別にCJとJNによる使用例数についてカイ2乗検定を行った結果、有意差が認められた ( $\chi^2(1)=6.922, p=.0085 < .01$ )。つまり、相手にかかる依頼行為の負担度の度合いは、CJによる授受補助動詞の使用の有無にはあまり影響を与えてないことが明らかとなった。

例えば、同じ上位者である「指導教員」に、それぞれ負担度の異なる「履修届けにサインをする」と「手書きの推薦書を書く」ことを依頼する場面では、JNは比較的負担度の低い「サイン」の場面では、用例の約7割が(6)のような「お願い」系の表現や「～てほしいんです/Vたいです」の願望表現であり、授受表現以外の「その他」の表現が多用されていることが分かる。

- (6) 先生、履修届けのサインをお願いしたいんですが。(問 I 1,JN17)

一方、CJは、負担度の度合いによる授受補助動詞の使用率の変化はほとんど見られないほか、上位者に対し、比較的負担度の低い「サイン」を依頼する場面でも、「～ていただく」型の授受表現の使用率(61.2%)が高く、しかも負担度の高低を問わず、(7)のような「～ていただけませんか」や「～ていただけませんか」などの依頼表現をパターン化し、使用している傾向がうかがえる。

- (7) a. 田中先生、お願いがあるんですが、履修届けにサインをしていただけませんか。(問 I 1,CJ02)

b. 先生、実は今奨学金を申請していますが、その、推薦書を書いていただけませんか。(問 I 4, CJ20)

話し手の利益となる依頼の場面において、CJは「その他」の表現の使用率がJNと比べ非常に低く、授受補助動詞による依頼表現が多い。その理由としては、授受補助動詞の機能が、日本語教科書では依頼の発話行為と関連づけて取り上げられることが多いためではないかと推察される。

調査後のFUI調査では、「中国語で依頼を行う際に、特に負担度の高低による表現上の違いはないと思う」(FUI01)や、「授業中、授受補助動詞は、依頼や感謝の表現と一緒に習っていた」(FUI04)、「親しい友達に何かお願いする時「教えて」のように「て」形を使うとか、「何々をお願いしたい」といった表現を教してもらったこともあるが、授受表現を使うのが一番無難だと思っていた」(FUI06)などの回答があった。このことから、授受補助動詞の運用上の問題を考える際に、日中両言語による発話行為上の共通点と相違点を意識すべきであることと共に、日本語教科書における授受構文の提示方式や、教授法の改善も求められることが指摘できる。

#### 4.4 「～テクレル」系と「～テモラウ」系の誤用例

CJによる今回の調査データには、授受補助動詞の使用に関する「文法上の誤り」のほか、「表現レベルの不適切な表現」の例も見られた。JFL環境における日本語能力試験NIに合格した中上級学習者でも犯す間違いであるため、初級段階で授受表現を教える際にまずおさえておかなければならない点でもあると考える。

まず、「文法上の誤り」に関しては、(8)のように授受補助動詞「～てくれる」の先行動詞である「貸す／借りる」の混乱による間違い、また、(9)のように依頼行為に「～てもらえますか／てもらえませんか」を使うべきところに、「\*～てもらいますか／てもらえませんか」を使ってしまったという依頼表現の形の誤用などが見られた。

〈「借りる」→「貸す」〉(10例)

(8) 消しゴムを忘れたんだけど、ちょっと借りてくれる? (問 I 2, CJ44)

〈「～てもらいますか」→「～てもらえますか」〉(21例)

(9) すみませんが、この間の授業を欠席しましたから、ノートを貸して  
もらいませんか。(問 I 5, CJ39)

そして、「表現レベルの不適切な表現」とは、4.1で述べた「不適切な無使用」の問題のほか、特に「下位かつ親」の相手である「後輩」に対し、命令や指示の機能を果たす「～てください」と「～てくれ」を過剰に使用する、という「～テクレル」系の授受補助動詞に関する運用上の問題が挙げられる。

「親かつ同等／目下」の相手に依頼を行うとき、JNもCJも「～てください」を使用する例が見られたが、JNは10例のみであるのに対し、CJは(10)のような使用例が42例もあった。下位の相手に依頼を行う際に、「～てください」が過剰に用いられる可能性が示された。

(10) 横井さん、すみません、この文献をドイツに訳してください。お願いします。(問 I 6, CJ48)

「～てください」は中国語の依頼表現「请…」に相当するが、中国語の「请…」は待遇レベルの高い場面や改まった場面において、相手への敬意を表す表現として用いられるため、「请…」と「～てください」の違いをうまく認識できていないことが今回の過剰使用の原因の1つだと考えられる。日本語の教科書では、依頼表現としての「～てください」が用いられる場面や相手の制限について十分な説明がされていないこともある。

また、「下位かつ親」の相手に依頼を行う場面3と6では、(11)のように「～てくれ」を使用した不適切な例文が合わせて12例見られた。「～てくれ」は、直接聞き手に発話する表現としてはぞんざいで、男性が家族や親しい友人に対して使う場合などに限られるため、自分の利益になる行為を相手に遂行してもらおう場面で使うと、相手に失礼な感じを与えてしまうことがある。そのため、

直接的依頼表現としての「～てくれ」の使用場面と相手についての制限を学習者に十分に理解させることが必要だと思われる。

(11)a. このシフト表を2階のキッチンまでもっていってくれ。(問I 3,CJ06)

b. 横井さん、ドイツ語がわかるよね。ごめん、ちょっと手伝ってくれ。

(問I 6,CJ66)

## 5 日本語教育への示唆と今後の課題

本稿では、JFL環境における中国人上級学習者による「～テクレル」と「～テモラウ」系の使用実態を、話し手が直接聞き手に何かを依頼する「対話の場面」と、話題の人物から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述の場面」に分けて調査し、その問題点をまとめた。なお、今回の調査は小規模なものであるため、日本語母語話者あるいは中国人学習者全体への一般化はできないが、最後に、本調査の結果をまとめながら日本語教育への示唆を試みる。

1) 授受補助動詞を使用すべきところで使用しない「不適切な無使用」の現象が、「話題の人物」から受けた恩恵的な行為を聞き手に伝える「叙述」の場面においては、「対話」場面より目立つ。つまり、行為の授受に「話題の人物(第三者)」の関与の有無は、学習者による授受補助動詞の使用と選択に深く関わっている。そのため、初級文法項目の学習を終えた中級学習者を対象に、授受補助動詞の指導を行う際に、日本語の話し手の立場から物事を捉える「話者中心性」と、第三者の行為に対しても話し手の価値判断を付与する主観性の強さという「立場志向性」の2つの特徴(大塚1995:283)を、中国語の「事実志向性」と比較しながら行うなど、指導を工夫する必要があると考える。

2) 「対話」と「叙述」のどちらの場面においても、「～てくれる」の使用率が「～てもらおう」より圧倒的に高いことから、「～てくれる」の習得が「～てもらおう」に先行して進むと考えられる。これまでの日本語教科書では、文型の提出順序と学習者の習得状況とのズレが生じるにもかかわらず、「～てくれる」と「～てもらおう」は同じ課でセットで提示され教えられてきた。この理由を考えると、やはり、学習者に恩恵的な行為の授受を表す3系列の補助動詞を比較

させ、わかりやすく習得させるようにという狙いがあると思われる。しかし、母語の中国語との関係や習得順序の面から考えると、行為の与え手が主語に立つ「～てくれる」を、行為の受け手が主語に立つ「～てもらおう」よりも先に教えたほうがよいと思われる。

3) 母語である中国語や中国文化の影響を受け、CJは、「対話(依頼)」の場面において、発話行為の負担度を授受補助動詞の選択の際に考慮していないという結果となった。今後、授受表現の語用論的指導を行う際に、「対話」か「叙述」かの場面に応じて、人間関係や発話行為上の負担度などの要素に配慮する必要があることが示唆される。

なお、授受補助動詞の使用と選択に関わる要素として、今回の調査では、使用場面や、行為者間の人間関係(親疎・上下)、発話行為上の負担度などを考察してきたが、その他の要素として地域差や、世代差、男女差も考えられるため、実際の教授場面での指導効果を検討することと共に、今後の課題とする。

〈大阪大学大学院生/大連理工大学[中国]〉

### 謝辞

本稿の執筆に際し、大阪大学大学院言語文化研究科の真嶋潤子教授から貴重なご指導とご助言を頂きました。ここに記して感謝致します。また、有益なご指摘とコメントを下さった査読の先生方にも深くお礼を申し上げます。

### 【付録資料 質問調査項目の例(「叙述」の場面)】

あなたは祇園祭を見に行ったことがありませんでした。あなたが頼んでいないにもかかわらず、先週、京都出身の同級生である清水さんが「案内しようか」と言って、あなたを京都まで連れて行きました。この出来事を友達の裕子さんに話してください。なお、友達の裕子さんは、清水さんのことは知りません。

あなた：先週初めて祇園祭を見に行っただ。

裕子：へえ、一人でやってきたの？

あなた：\_\_\_\_\_。

裕子：そうなんだ、よかったね。



## 注

- [注1] …… 本稿では、「～テクレル」系は「～てくれる」と「～てくださる」の2つの形式の総称としてカタカナ表記にする。一方、具体的に1つの形式を記述する場合は、これと区別し「～てくれる」「～てくださる」のように平仮名表記にする。
- [注2] …… 「話題の人物」とは、話題の中に登場するその場にはいない行為の与え手となる第三者のことを指す。
- [注3] …… 本稿では、荒巻（2003）に倣い、ある文の中で授受表現を使用している場合を「使用」、使用していない場合を「無使用」と呼ぶ。また、使用すべきでないところでの使用は「不適切な使用」、使用すべきところで使用していないことは「不適切な無使用」としている。
- [注4] …… 問Ⅱ1は問題番号、CJ34は調査協力者の番号を表す。以下、同様。
- [注5] …… 「立場志向文」とは、授受表現や、「～てくる・いく」、「～てしまう」、「～ておく」、使役、受身などの表現があげられる（水谷1985）。
- [注6] …… 周平・陳小芬（1993）『新編日本語』（全四冊）上海外国語教育出版社／孫宗光・簡佩芝ほか（2004）『新編基礎日本語』（全四冊）上海訳文出版社／彭大陸・守屋三千代（2005）『総合日本語』（全四冊）北京大学出版社
- [注7] …… FUIは中国語で行った。訳は筆者。

## 参考文献

- 荒巻朋子（2003）「授受文形成能力と場面判断能力の関係—質問紙調査による授受表現の誤用分析から」『日本語教育』117,pp.43-52. 日本語教育学会
- 庵功雄（2011）「日本語教育から見たやりもらい表現」『日本語学』30(11),pp.50-58. 明治書院
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合』南雲堂
- 井上優（2011）「日本語・韓国語・中国語の「動詞+授受動詞」」『日本語学』30(11),pp.38-48. 明治書院
- 大塚純子（1995）「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に」『言語文化と日本語教育』9,pp.281-292. お茶の水女子大学
- 奥津敬一郎・徐昌華（1982）「「～てもらう」とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に」『日本語教育』46,pp.92-104. 日本語教育学会
- 柏崎秀子（1995）「談話レベルで捉える丁寧さ—談話展開が丁寧度判定に与える影響」『日本文化研究所紀要』1,pp.61-75. 亜細亜大学
- 坂本正・岡田久美（1996）「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア 文学・語学編』61,pp.157-202. 南山大学
- 田中真理（1996）「視点・ヴォイスの習得—文生成テストにおける横断的及び縦断的研究」『日本語教育』88,pp.104-116. 日本語教育学会
- 田中真理（1997）「日本語学習者の視点・ヴォイスの習得—「受益文」と「視点の統一」を

- 中心に」*Proceedings The 8th International University of Japan Conference on SLR in Japan*, pp.107-135.
- 堀口純子（1983）「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52,pp.91-103. 日本語教育学会
- 益岡隆志（2001）「日本語における授受動詞と恩恵性」『日本語学』4,pp.26-32. 明治書院
- 水谷信子（1985）『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』明治書院
- 尹喜貞（2004）「第二言語としての日本語の授受動詞習得研究概観—習得順序の結果と研究方法との対応に焦点をあてて」『第二言語習得・教育の研究最前線2004年版』pp.168-181. 日本言語文化学会

